ユーゲント・フィルハーモニカー
第４回定期演奏会

Jugend Philharmoniker

The 4th Regular Concert

Charles Camille Saint-Saëns

サン=サーンス / 交響詩《死の舞踏》Op.40

Claude Achille Debussy

ドビュッシー / 小組曲（ビュッセル編）

I *En Bateau* 小舟にて
II *Cortège* 行列
III *Menuet* メヌエット
IV *Ballet* バレエ

— 休憩 —

Sergei Vasilievich Rachmaninoff

ラフマニノフ / 交響曲第2番 ホ短調 Op.27

I Largo - Allegro moderato
II Allegro molto
III Adagio
IV Allegro vivace

指揮 時任 康文

※ 開演中は携帯電話の電源をお切り下さい。
※ 他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮下さい。

ご挨拶 Greeting

本日はユーゲント・フィルハーモニカー第４回定期演奏会にお越しいただきまして，誠にありがとうございます．

2006年に結成された当団も今回で４回目の定期演奏会を開催するに至ります．今まで当団の説明の折には「生まれたての『赤ん坊』のようなオーケストラ」という言葉を用いてまいりましたが，人間であればもう４歳，「赤ん坊」とは呼べない齢になりました．

今年度は，時任康文先生のご指導のもとで日々練習を重ねてまいりました．ドビュッシー，サン=サーンスの幻想的かつ繊細な表現と，それに相反するかのようなラフマニノフの精神的・内面的部分の描写の違いを楽しんでいただくと同時に，「赤ん坊」から「幼児期」への成長の証を見届けいただければ幸いです．

最後になりましたが，ユーゲント・フィルハーモニカーの運営・活動にあたってお力添えをいただいたすべての皆様に，この場をお借りして厚く御礼申し上げます．ありがとうございました．

指揮者紹介 Conductor

Yasufumi Tokito
時任　康文

武蔵野音楽大学器楽科を卒業後，東京音楽大学指揮科に学ぶ．指揮を紙谷一衛，汐澤安彦，両氏に師事．在学中より二期会，日生劇場，ヘネシーオペラシリーズのオペラ公演を中心に，音楽スタッフ及び合唱指揮者として参加．小澤征爾氏，秋山和慶氏，若杉弘氏，佐藤功太郎氏，松井和彦氏等のアシスタントを務めた．1990年「東京の夏」音楽祭に於いて，カールマンのオペレッタ「チャールダッシュの女王」を指揮してデビュー．平成8年文化庁派遣芸術家在外研修員としてイタリアに留学．イタリアオペラの巨匠ネッロ・サンティ氏のアシスタントとして研鑽を積んだ．2001年にはウズベキスタン，カザフスタンにおいて，團伊玖磨作曲オペラ「夕鶴」を指揮．2002年には，新国立劇場小劇場シリーズでオルフのオペラ「賢い女」を指揮し好評を博した．また，同年の東京オペラプロデュース公演，ウイリアムス作曲のオペラ「恋するサー・ジョン」を始め本邦初演の指揮も多く．2004年にはオッフェンバック作曲オペラ・ブーフ「天国と地獄」の原語（仏語），2005年にはマルシュナー作曲のオペラ「ヴァンパイア」(吸血鬼)，2007年にはシャルパンティエのオペラ「ルイーズ」原語，2010年1月にはジョルダーノのオペラ「マダム・サンジェーヌ」の本邦初演を指揮した．この他にプロオーケストラの客演も多く，好評を博している．現在，東京音楽大学，武蔵野音楽大学，及び二期会オペラ研修所講師．

楽団紹介 Orchestra

Jugend Philharmoniker
ユーゲント・フィルハーモニカー

Jugend Philharmoniker（ユーゲント・フィルハーモニカー）は，財団法人「日本青年館」の音楽行事（オーケストラ･フェスタ，全国高等学校選抜オーケストラ･ヨーロッパ公演，日本ユンゲ･オーケストラ･ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである．

選抜オーケストラが母体となっているため，メンバーは様々な大学オケ出身のプレイヤーが揃っている．現在，団員約80名を越えるオケにまで成長し，定期演奏会を中心とした活動の他に，福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏，その他，行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている．

音楽的に人間的に成熟した団体作りに励みながら「アマチュア・オケだからできること（≒プロオケには出来ないこと）」を追求することを理念としている．

Charles Camille Saint-Saëns
サン=サーンス / 交響詩《死の舞踏》Op.40

サン＝サーンスの曲を挙げろと言われたらどの曲を真っ先に思い出すだろうか．オーケストラで交響曲ばかり演奏しているとついつい交響曲第三番《オルガン付き》と言いたくなる．オルガニストだったサン＝サーンスらしい壮大な曲である．しかし，ごくごく一般的に知られている曲として『白鳥』も挙げられるのではないだろうか．チェロの独奏のための甘美な曲として有名な組曲《動物の謝肉祭》の中の一曲であり，ときにはヴァイオリンでも演奏されている．生前にこの組曲の出版を許さなかったサン＝サーンスだが，強い要請により『白鳥』だけは出版を許したらしく，それも有名である所以なのかもしれない．

ところで，この有名で美しい『白鳥』のすぐ前に『化石』という曲が組曲中にあるのをご存知だろうか．なぜ『骨』ではなくて『化石』にまでなってしまったのか，非常に謎深くて興味深い．博物館動物園という大きなくくりで見たら同じなのかもしれないが･･･．この『化石』という曲，聴いてみるとどう考えても『骨』なんてものではない．ちょっと滑稽で，ちょっと非日常的，そして既に化石であるにも関わらずある種の生命力が宿っている感じがする，そんな曲なのである．

前置きが長くなったが，この『化石』には《死の舞踏》の曲の断片が使われている．雰囲気は違った曲なのだが，どちらの断片も骨という生命が抜けた後の物体を擬人化させるためにサン＝サーンスが用意したモチーフなのだろう．この断片，『化石』では骨っぽさを出すために木琴を使っている．対して《死の舞踏》では骸骨の不気味さを表現するために，ソロヴァイオリンの開放弦がEsを鳴らすようE線を半音下げる特殊調弦をして演奏する．実はわざわざ特殊調弦をしなくてもこの曲のヴァイオリンのソロを演奏することは可能だ．しかし，弦楽器で一番甲高いヴァイオリンのE線開放弦をあえて半音ずらして調弦してみるとどれだけ強烈なことが起きるのか…体感していただきたい．

(N)

Claude Achille Debussy
ドビュッシー / 小組曲（ビュッセル編）

『小組曲』は元々ピアノ連弾曲として作曲され，「小舟にて」「行列」「メヌエット」「バレエ」と副題の付された4曲からなる作品である．後に「印象主義音楽」と呼ばれる作風がまだ形成期にあったドビュッシーの若き頃の習作だ．後にドビュッシーの友人で指揮者のアンリ・ビュッセルにより管弦楽版へ編曲された．編曲されたのはドビュッシー晩年の頃で，この作品には印象主義の凝った作曲技法が模倣的に織り込まれ，一躍有名になった．

「音楽に国境はない」とはよく言うが，演奏者は，作曲者の生きた国（作品の生まれた背景）によっては「音楽的な国境」を越えなければならないことがある．国と音楽表現の結び付きは密接な関係にあり，どんな演奏家もその強力な関係を無視することは出来ない．言語と同じように，音楽にも国や地域によって違った語法というものが存在しているのだ．

日本人はどこか生真面目で几帳面なところがあるから，断定形で重々しく語るドイツ音楽や粘っこく情熱的に語るロシア音楽は，素直に真正面から取り組んでコツさえ掴んでしまえば，それなりに自分の歌にすることができる．そんな日本人が演奏に一番苦労するのがフランス音楽だ．フランス音楽にはフランス語と同じように独特のニュアンスがある．それを表現するにはフレーズの最後を断定形で言い切らずにフワっ

と曖昧にしたり，音符の長さ通り伸ばさず音を抜いたりと楽譜には書いていない洒落たセンスが必要になる．つまり楽譜に正直に演奏していると真逆のニュアンスになってしまうことが多いのだ．ユーゲントの団員にとってもそれは同じで，最初の頃は指揮者に「それじゃベートーヴェン風だよ（笑）」なんて言われながら洒落たフランス音楽の雰囲気を学び，今日まで練習してきた．本日はドイツの名を持つオーケストラの日本人によるフランス音楽を心行くまでお楽しみいただきたい．　(taxi)

Sergei Vasilievich Rachmaninoff
ラフマニノフ / 交響曲第2番 ホ短調 Op.27

エスニックジョークというものをご存知だろうか．民族性や国民性を題材にした小ネタで，例えば代表的なものとして「無人島ジョーク」と呼ばれるものがある．

1人の美女と2人の男性が無人島に漂流したとき．
イタリア人．何の気兼ねもなく2人の男は共に1人の美女を愛する
ドイツ人．1人の男は美女と結婚し，残った1人は戸籍係になる．
日本人．どうしたら良いか本社に問いあわせようとする．

ジョークの解説ほどむなしいものはないが敢えて述べると，これらは「イタリア人=プレイボーイ」「ドイツ人=規則好き」「日本人=会社人間」という傾向を揶揄したものであろう．この手のジョークはステレオタイプな一面を持つ一方で，その国や民族の文化的・歴史的な背景をある程度は示唆しており興味深い．さて，この無人島ジョークには以下のようなものもある．

ロシア人．美女は愛していない方と結婚し，3人で海辺に座って嘆き悲しむ．

きっと彼らの「大袈裟なほどに感情的な」側面を感じ取れるだろう．

余談が過ぎた．ラフマニノフは人間の内面を映し出したロマン派のロシア人作曲家である．ロマン派の交響曲では「苦悩」から「葛藤」や「やすらぎ」を経て「歓喜」に至る「暗から明へのプロセス」が描かれることが多く（ベートーヴェンの「運命」や「合唱付」を考えて欲しい），交響曲第2番もその典型と考えられる．このような交響曲が書かれるにあたっては作曲家を苦悩たらしめる「悲劇」があるものだが，ラフマニノフの場合は交響曲第1番初演の不評がそれに相当する．この不評自体は初演時の指揮者が不勉強だったことに由来すると言われるが，とにかくこれがきっかけとなり彼は神経衰弱に陥ってしまうのだ．その後，暗示療法による治療やピアノ協奏曲による成功などで彼は復調のきっかけを掴み，交響曲第2番に取り組む．

ところで，「中二病（ちゅうにびょう）」というスラングがある．思春期にありがちな自意識過剰に由来する言動傾向を「小児病（しょうにびょう）」になぞらえたものだ．ちょっとした不幸をもって「自分は悲劇のヒーロー/ヒロインに違いない」などと思い込んでしまうのもその「症例」の1つだろう．少し考えてみて欲しい．これは先に述べたロマン派の交響曲を書く作曲家そのものではないか．「狂人と天才は紙一重」とはよく言うが，「作曲という行為を通した欲求不満の昇華」が優れたものであるかどうかだけがその違いであれば「中二病と天才も紙一重」なのかもしれない．

ラフマニノフの交響曲第2番が優れた作品とされるのは，決してその甘美なメロディーだけにあるのではない．一歩間違えば単なる中二病に陥るロマン派交響曲に「大袈裟なほどに感情的な」ロシア風味を加え，絶妙な「危うさ」の上に美を築き上げたところにこそその魅力があるに違いない．　(rinsan)

活動紹介 Activity

今年度の主な演奏活動です.

3/21 第3回定期演奏会
めぐろパーシモンホール

難病や障がいを持つ子ども達とその家族を閉園後の動物園へ招待する世界的なイベント「ドリームナイト」にて子どもたちに室内楽の演奏を届けました.

6/6 ドリームナイト・アット・ザ・ズー
横浜市立金沢動物園

2009

8/21 慰問演奏会
介護老人保健施設 秀眉園

9/19-22 第2回農村プロジェクト
長野県武石地区

普段生のオーケストラに触れられない農村に行き，中学生との合同練習や農作業の体験など地元の方々と交流をはかり，最終日にオーケストラによる演奏会を開きました.

11/3 慰問演奏会
特別養護老人ホーム 芦花ホーム

世田谷区にある特別養護老人ホーム芦花ホームで行われている数日に渡る文化祭の中の1つのイベントとして，童謡からクラシックまで幅広く室内楽の演奏をしました．聴いて下さった方々が演奏に合わせて歌ってくださり，とても楽しい時間になりました.

2010

3/21 第4回定期演奏会
文京シビックホール

依頼演奏

ユーゲント・フィルハーモニカーでは学校・老人ホームなどの福祉施設や，その他各種イベントなどでの依頼演奏を受け付けています．詳しくは当団Webサイトをご覧下さい.

■ Webサイト　http://jugend-phil.com/

Jugend Philharmoniker
The 4th Regular Concert
2010.3.21 (Sun.)
at Bunkyo Civic Hall

ユーゲント・フィルハーモニカー
第５回定期演奏会のお知らせ

2011年3月19日（土）夜公演
於　めぐろパーシモンホール　大ホール
曲目未定

■ 後日ご案内をお送りしますので，アンケート用紙にご連絡先をご記入下さい．
■ お問い合わせ　http://jugend-phil.com/（当団Webサイト）